

信長の娘と伝えられた女性

戦国時代に毛利家と婚姻関係を結んで同盟関係を築き、江戸時代は萩藩一門筆頭となった宍戸家。宍戸元統の最初の妻であり、元統との間に一女（右田元俱の妻）を儲けた女性は、織田信長の娘と伝えられています。実は、彼女は様々な顔を持っており、信長の娘云々という説はその一部にすぎません。

本展示では、当館所蔵資料の中からこの女性に関する史料を紹介します。

【展示リスト】

※途中で展示替をします。

番号	史料名	請求番号	10/1～15	10/16～29
①	巨室系図	毛利家文庫複写資料435	○	
②	風土注進案 三丘村之内小松原村	291/Y00		○
③	司箭伝 付宍戸元統室家之弁	毛利家文庫複写資料439	○	○
④	豊臣秀吉朱印状	複写資料275(3)	○	
⑤	豊臣秀吉朱印状	複写資料275(3)		○
⑥	霧の墓	210/400	○	○

【解説】

1 宍戸元統の妻に関する説

宍戸家系図（史料1）には、元統の最初の妻は織田信長の娘であると記されています。彼女の墓がある周南市小松原でも、古くからそのように言い伝えられています（史料2）。

ところで、「司箭伝 附宍戸元統室家之弁」（史料3）は、この女性に関して、二つの説があることを紹介しています。一つは、彼女は信長の娘で、毛利元俱（右田毛利2代）の妻の母親だとする説。もう一つは、内藤左京某の姉妹で、毛利輝元の養女として織田信忠（信長嫡子）の嫡子「於次丸」（秀勝）へ嫁ぎ、「於次丸」死後、宍戸元統の妻となったという説です（ただし、「於次丸」を信忠の子とするのは誤りで、正しくは信長の子です）。

この二つの説はどちらが正しいのでしょうか。

2 信長の娘説

江戸幕府の命で作られた「寛政重修諸家譜」等に掲載の織田家系図には、養女を含めると12人確認できる信長の娘の中に、宍戸家に嫁いだという娘のことは出てきません。ただし、毛利氏と信長との関係が悪化していない時期には婚姻関係を結ぶ話があったことは事実です。その可能性があった時期と、この女性が宍戸元統に嫁ぎ娘を儲けた時期を比べると、13年～20年の隔たりがあります。結婚後すぐに子供に恵まれなかったとしても、当時の平均寿命からすればこの時間

差は大きいと考えられます。したがって、元統の最初の妻を信長の娘とする説は、成り立つ可能性は低いと考えられます。

3 輝元養女=秀勝の妻説

この女性は、生まれも含め色々な顔を持っています。

①内藤左京の姉妹=内藤元種の娘=輝元の従姉妹（=内藤興盛の孫娘）

前述の「司箭伝」によると、内藤左京の姉妹とは内藤元種の娘のこととされます。元種の姉妹は毛利輝元の母親なので、輝元からすれば、元種の娘は母方の従姉妹に当たります。なお内藤家は、大内氏の時代に長門守護代を世襲した家です。

②輝元の養女

この女性は従兄弟である輝元の養女となります。彼女は輝元の正室とも縁続きになります。

③羽柴秀勝（信長の実子で秀吉の養子）の妻

この輝元の従姉妹が、正式に毛利家の娘として於次丸秀勝（信長の実子で、信長の後継者となった秀吉の養子）に嫁ぎます。

④宍戸元統の（最初の）妻

秀勝と死別後、彼女は実家である安芸国の毛利家に戻って、宍戸元統と再婚します。彼女と元統は共に内藤興盛の孫、つまり従兄弟同志です。

⑤毛利元俱妻の母親

彼女が元統に嫁いで儲けた娘が、成長して毛利元俱の妻となります。

以上紹介した彼女の様々な顔の内の多くは、他の史料からは裏付けがとれません。しかし、例えば、略系図に示したような、内藤家の娘が重縁の間柄にある毛利家の養女として他の大名家に嫁いだり、実家にもどってからまた宍戸家に嫁ぐというようなことは自然な話です。また、この女性が宍戸元統に嫁いだ時期と元統との間に娘を儲けた時期はほぼ同じ時期なので、この点でも違和感はありません。

さらに、これらの説を前提とすると大変理解しやすい文書が当館に残っています。

4 秀吉から娘と呼ばれた女性

毛利家の一門右田毛利家に伝わった豊臣秀吉の朱印状（史料4・5）がそれに当たります。右田毛利家は、この話の主人公である女性が生んだ娘の嫁ぎ先でもあります。

この二つの史料の宛名である「御もし」、「五もし」は娘という意味です。史料4は、自分の身近からどこかに下向させたい娘の道中を案じていた秀吉が、無事に到着したという知らせと贈り物を受け取って安堵した旨を伝えた返事です。一方史料5は、同一人物と考えられるその娘から「文」（手紙）と贈り物として「かひき」（絹）をもらった、その礼状です。特に後者の史料5では、この女性は、「あき」を冠して呼ばれていることが注目されます。「あき」とは、「安芸国」（現広島県）、具体的にはここを本拠としていた毛利家の

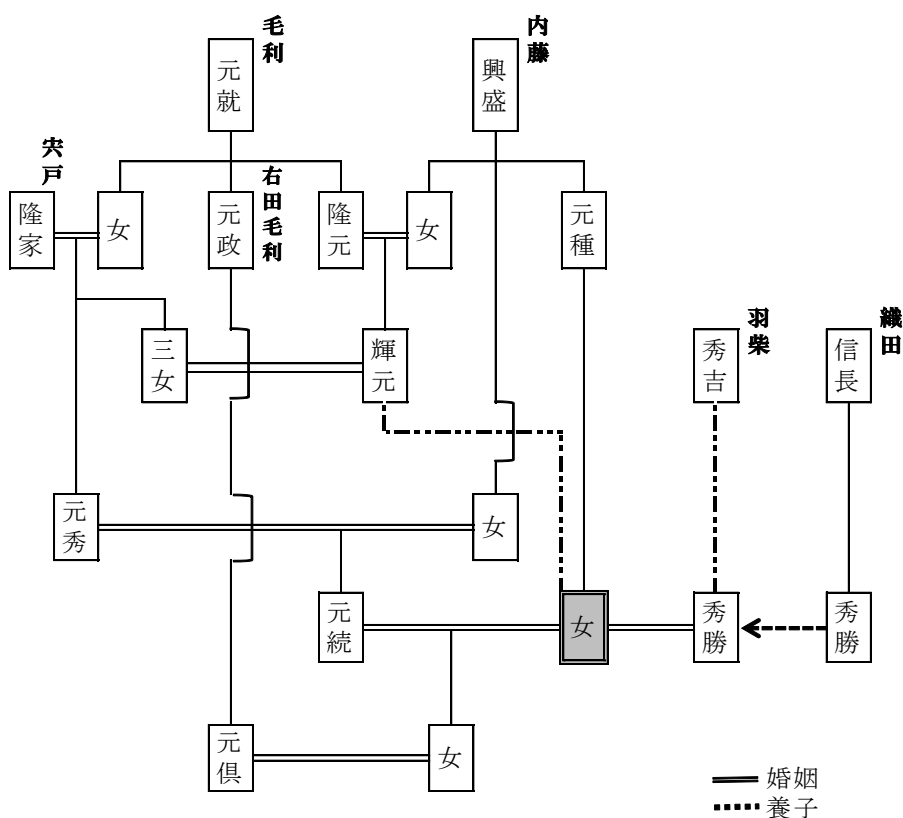
ことを意味します。したがって、この場合「あきの五もし」とは安芸国の毛利家にいる娘という意味になります。

これらの史料からは、秀吉から安芸国にいる娘よと親しくよばれた女性が毛利氏側において、手紙や贈り物をやりとりしていたことがうかがえます。この「あきの五もし」が、いったんは秀吉の養子の秀勝の妻となり、のち宍戸元統と再婚した女性と同一人物だとすれば、色んなことが理解しやすくなります。この秀吉の礼状が、毛利家や宍戸家ではなく、ほかならぬ右田毛利家に伝わった理由も、彼女の娘が右田毛利家に嫁いだという縁によるものだと考えれば、うまく説明できます。

以上を勘案すると、宍戸元統の最初の妻は輝元養女＝秀勝の妻であったとする説は、十分ありうる話なのです。

5 結論

毛利方の出身で、信長と縁ができ（信長の息子＝秀吉の養子の嫁となった）、後に宍戸元統の妻になった女性がいました。実際の彼女は、信長よりも、秀吉とのつながりの方が強かったようです。しかし、「どうも信長と縁のあった人らしい」という信長とのつながりの方が人びとの記憶に残って後世へ伝えられたのではないかと考えられます。



関係略系図

◆もっと知りたい人は◆

西尾 和美：「豊臣政権と毛利輝元養女の婚姻」

(川岡勉・古賀信幸編『日本中世の西国社会① 西国の権力と戦乱』，清文堂，2010年)